

令和元年6月17日現在

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K02557
 研究課題名(和文)「抗争」言説の再検討(ドイツ文学の場合)

研究課題名(英文) Reconsidering the Discourse of "Agon"

研究代表者

大宮 勘一郎 (OMIYA, Kanichiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：40233267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは、近代ドイツ文学における「抗争」モチーフを検討する作業として、レッシング、ゲーテ、クライスト、ヘッベルらの作品の分析を行ったうえで理論的構築を進めた。作品に描き出される様々な「抗争」に焦点を当て、それがいかなる仕方でも18世紀の文学言説へと組み込まれ、また19世紀にいかなる変容を遂げ、さらに、いかにして20、21世紀の荒廃へと至ったか、文芸作品以外の様々なテキストとの参照関係の中から考察した。「文学」という、近代的には個人の営みと専ら考えられる現象が、「個人」以前のネットワークの中で生じるものであることを、を内外の研究者との交流によって進め、議論を進化させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトは、理論的構築と対話的議論を結合する形で進めた。一方において申請者は、資料の収集と読み込みを通じて、従来の研究蓄積を再検証しつつ考察を進めた。その際、いわゆる文芸テキストのみならず、周辺諸科学の知見を広く取り入れ、その中で文芸テキストの位置づけを定めてゆく学際性を重視した。本研究は他方、欧米とりわけドイツ語圏の研究者との議論の機会を積極的に設けた。こうした国際性と学際性に重点を置くことにより、文学研究の領域拡張に資することができ、また、文学が現代の社会的課題と根幹において関わる問題を常に主題化していることを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The objective of this project was to clarify the "agon" relationship in the sense of competitive dispute based upon reciprocal responsibilities between the persons concerned which is represented in the modern German literature such as Works of Lessing, Goethe, Kleist or Hebbel. The "agon"-relationship has been transformed in the 19th Century into the trigonal relationship among isolated individuals and intermediary instance, which however was devastated in the 20th and 21st Century. By investigating the pre-individualistic situation described very often in the German literary works around 1800 the historical condition of the individualism and its limit has been made clear. Furthermore the literary production could be reconsidered from the perspective of formation of numerous competitive discourse networks.

研究分野：ドイツ文学・ドイツ思想

キーワード：抗争性 コミュニケーション ドイツ文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年のドイツ文学研究において、18世紀への注目が著しい。しかも、18世紀の作家や作品を統一体として個別の研究対象とするのではなく、むしろより広い文学的現象を考察・研究するものが多く現れている。例えば「編集」「浄書・校合」といった、作家や作品からすれば周辺的ではあるが、作家・作品を「文学」という言説ネットワークに繋ぎとめるためには必須である事柄が扱われる。様々な社会的制約はあったものの、近代文学がいわゆる「国民文学」として自立し規範化する以前の、多方向的な可能性を秘め、また「作者主体」が理想化されるのにも先立つこの時代に対する関心は、「国民」や「作者」、「作品」といった理念の規範性と妥当性が揺らいでいる現在であるからこそ、ドイツ文学をどのような言説群が編成していったのかを反省し再検討する必要がある、という機運の高まりの証左である。本研究は、こうした18世紀研究に刺激されつつ、近代的「主体」が独立自存した個人として観念されるのに先立ち、「二」という双数的関係において繰り広げられる「抗争」が、「一」の主体化を準備した、その過程を跡づけることを目指す。こうした動向にも自覚的に寄り添い、文学言語の自己反省に一石を投じるものとして構想されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代ドイツ文学を形作る言説のひとつとしての「抗争 *Widerspiel*」を、その歴史の変容に焦点を当てて考察し、その由来と編成を時代・社会的条件に鑑みつつ解明することにある。「抗争」は、ドイツ文学が範としたギリシャ悲劇においては「神々や運命と人間」の間で多く主題化されたが、近代文芸においてはこれにとどまらず、公的な出来事としての「戦争」や「裁判」から、私的な出来事としての「反目」や「嫉妬・怨嗟」に至るまで、様々な規模と局面において描き出される。本研究の具体的作業は、ドイツ文学に現れる「抗争」をつぶさに検討することで、一方ではドイツの文芸言語の特質に迫り、他方また歴史的観点から、「友愛」「恋愛」「正義」といった他の言説との相互連関において、その由緒からの変容過程を跡づけることであった。とりわけ文芸作品において描き出される様々な「抗争」に焦点を当て、それがいかなる仕方ですら18世紀の文学言説へと組み込まれ、また19世紀にいかなる変容を遂げ、さらに、いかにして20世紀の荒廃へと至ったか、文芸作品以外の様々なテキストとの参照関係を調べてゆくことから明らかにしてゆくことを目指した。また、「抗争」は多様な局面において生じるのみならず、歴史的過程の中でその表現形態を変容させているが、その変容条件を考察することで、「作者存在 *Autorschaft*」、「政治的主体」、「認識主観」といった個人本位的な人間観・社会観の形成との連関を析出することを試みた。同時に、こうした個人本位主義の問題点と限界を考察する。さらに、「文学」という、近代的には個人の営みと専ら考えられる現象が、「個人」以前のネットワークの中で生じるものであるという、メディア論が明らかにした認識は現代における文学研究の前提となっているが、それが「個人」を生み出すに当たって果たしていたであろう「抗争」の役割を再検討することが課題であった。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、理論的構築と対話的議論を結合する形で進めた。一方において申請者は、資料の収集と読み込みを通じて、従来の研究蓄積を再検証しつつ考察を進めた。その際、いわゆる文芸テキストのみならず、周辺諸科学の知見を広く取り入れ、その中で文芸テキストの位置づけを定めてゆく学際性を重視した。本研究は他方、欧米とりわけドイツ語圏の研究者との議論の機会を積極的に設けた。具体的には、ドイツ・ベルリン自由大学のシュレーゲル文学研究所や、マンハイム大学、ハーゲン大学の研究者との交流である。計画1年目にドイツの各大学で講演を行い、2年目には国際シンポジウムに2度参加し、意見交換の機会とした。また、2年目、3年目には、学会シンポジウムにおいて3度パネリストをつとめ、意見交換を積極的に行った。

4. 研究成果

2016年度は、ドイツ文学における「抗争」モチーフを検討する作業として、レッシング、ゲーテ、クライスト、ヘッベルらの作品の分析を行い、その中間的成果を平成28年4月にドイツ、ハーゲン大学における招待講演の枠で発表した。また、同5月にはマンハイム大学における招待講演枠で「抗争」と「正義」の近代思想史について講演を行った。同8月には韓国・ソウル市の中央大学校を会場としたアジア・ゲルマニスト会議において基調講演を行った。総合テーマ「大きな変革期におけるドイツ文学」に準拠し「グローバル化の時代における翻訳の使命」という題目で、「翻訳」における言語間の抗争性の表現という役割の重要性を指摘した。もとより「抗争」とは、共通の秩序を遵守することを前提とした、主に言論によるたたかいであり、アジア各国のドイツ文学者との率直・真摯な意見交換は、本プロジェクトの展開にとっても非常に意義のあるものであった。研究代表者の講演をもとにした論文が、現在印刷中の記録論文集に掲載される。同11月には、ベルリン・学術アカデミーにおいて「人文科学と社会的要請」というフォーラムに参加し、人文科学にこそ本質的に託されている抗争性の社会的意義を主張した。このフォーラムには、いまだに少なからぬ反響がある。さらに同月、ベルリン自由大学フリードリヒ・シュレーゲル研究所において、「日独比較文化論」をめぐるシンポジウムに参加し、日本浪漫主義が1930年代の知的文脈において果たそうとし、必ずしも果たし得なかった抗争的役割について講演を行った。本講演をもとにした論文が刊行される見込みである。その他、ドイツ文学やドイ

つ思想に関するいくつかの啓蒙的小文を、様々なメディアに寄稿した。

2017年度は、プロジェクト2年目として、プロジェクトテーマに関わる論文を2本執筆し、1本は刊行された。また、日本独文学会においてシンポジウムを企画、司会及びパネリストとして発表した。これとは別に研究シンポジウムのパネリストとして2つの口頭発表を行った。さらに、学会誌欧文版の責任編集を担い、特集テーマ導入の序論を執筆し、刊行された。論文は現代イギリスの作家カズオ・イシグロによる、ドイツの都市を架空の舞台とした小説を論じた『「充たされざる者」あるいは終わりなき慰撫』、2015年にドイツの現代史研究において起こった学問スキャンダルを論じた「ドイツ再統一と政治的言説の変容」であり、独文学会シンポジウムは「ハインリッヒ・フォン・クライスト 政治的詩人が政治的なるものの詩人か」、個別発表は『ペンテジレーア』 政治的なるものと愛』、その他のパネル発表は、国際シンポジウムにおける「Auf der Bruecke wohnen ueber Heideggers "Bauen Wohnen" nachdenken (橋上に住まう ハイデガー「建・住」再考)」および「ヨーロッパの文学 ドイツの場合」である。学会誌テーマは「Halt, Schritt, Trab, Galopp Walter Benjamin weiter, tiefer lesen (静止、常歩、速歩、駈足 ヴァルター・ベンヤミンをより広く、より深く読む)」である。政治(越境と客人歓迎) 歴史(伝統と近代) 記憶(回想と抑圧) 恋愛(自由と拘束)と、分野は分かれているが、いずれも「抗争」言説の分析研究を基本とした業績である。

2018年度は、研究最終年度として、(1)日本独文学会春季研究発表会(於早稲田大学)におけるシンポジウム「断絶のコミュニケーション」のパネリストとして「ドイツ再統一後における反ナチズム言説と全体主義理論」の表題にて発表を行った。これをもとに充実させた論文「ドイツ再統一と政治的言説の変容」が、論文集『断絶のコミュニケーション』(ひつじ書房)に掲載され刊行された。(2)ドイツ文学研究誌『詩・言語』に「ヘッセのアメリカ/アメリカのヘッセ」という表題にて、アメリカにおける近代ドイツ文学の受容の問題を扱った。(3)2017年に行われた国際シンポジウム「住むこと/途上にあること wohnen/Unterwegssein」(於学習院大学)における発表「橋の上に住むこと - ハイデガー「建・住」再考 Auf der Bruecke wohnen ueber Heideggers "Bauen Wohnen" nachdenken」が、ドイツで刊行された論文集"Wohnen und Unterwegssein" (Transcript社)に掲載された。(4)日本独文学会文化ゼミナール(於蓼科リゾートホテル、2019年3月)にて、講演「死者の語り Die Sprache der Toten. Die historische Dimension vom „Habitus“-Begriff und die „Pathosformel“ bei Aby Warburg」(ドイツ語)を行った。また、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究の論文集としての刊行準備が進んでいる。これらの業績は、いずれも「抗争性」という観点からコミュニケーション(雑誌論文1に反映) 文化の受容と変容(同2に反映) 越境(同3、4、5に反映) 秩序とその組み替え(同6に反映)といった問題を再検討したものであり、それぞれの主題に関して仲介的第三者を前提としない双務的關係からの秩序の自発的発生の可能性を探った。

プロジェクト全体としては、研究発表に対する肯定的な反響も多く、非常に実りあるものとなったと考えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

- 1 大宮勲一郎、ドイツ再統一と政治的言説の変容、『断絶のコミュニケーション』、査読有、2019、93-122
- 2 OMIYA, Kanichiro、Auf der Bruecke Wohnen—ueber Heideggers Bauen und Wohnen nachdenken, Wohnen und Unterwegssein. Intersisziplinaere Perspektiven auf west-oestliche Raumfigurationen, Transcript 出版、査読有、2019、139-155
- 3 OMIYA, Kanichiro、Einleitung zum Sonderthema: „Halt, Schritt, Trab, Galopp – Walter Benjamin Weiter, Tiefer Lesen“, 『ドイツ文学』、日本独文学会学会誌、査読有、Vol. 155、2018、7-13
- 4 大宮勲一郎、ヘッセのアメリカ/アメリカのヘッセ、『詩・言語』東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会、査読あり、2018、1-13
- 5 大宮勲一郎、『充たされざる者』あるいは終わりなき慰撫、『ユリイカ』、カズオ・イシグロ特集、査読なし、2017、169-176
- 6 大宮勲一郎、配分か交換か 近代以降の正義と文学、『ドイツ文学』、日本独文学会学会誌、査読有、Vol. 152、2016、132-148

[学会発表](計 10 件)

- 1 OMIYA, Kanichiro、Die Sprache der Toten. Die historische Dimension vom „Habitus“-Begriff und die „Pathosformel“ bei Aby Warburg、日本独文学会主催文化ゼミナール、於蓼科リゾートホテル、2019
- 2 大宮勲一郎、ドイツ再統一後における反ナチズム言説と全体主義理論、日本独文学会春季研究発表会シンポジウム、於早稲田大学文学部、2018
- 3 大宮勲一郎、「ヨーロッパの文学」とドイツ、集英社高度教養寄付講座「ヨーロッパの文学」、於東京大学、2017
- 4 OMIYA, Kanichiro、Auf der Bruecke wohnen – Über Heideggers Bauen und Wohnen

nachdenken、国際シンポジウム „West-oestliche Raumfigurationen - Wohnen und Unterwegssein“、於学習院大学、2017

5 大宮勘一郎、ペンテジレーア 「政治的なるもの」と「愛」、日本独文学会春季研究発表会シンポジウム、於日本大学文理学部、2017

6 OMIYA, Kanichiro、Von Kokugaku zur Japanischen Romantik、ベルリン自由大学（ドイツ）2016

7 OMIYA, Kanichiro、Die Aufgabe der Uebersetzung im Zeitalter der Globalisierung、アジアゲルマニスト会議、ソウル中央大学校（韓国）2016

8 OMIYA, Kanichiro、Statement zur Podiumsdiskussion „Geisteswissenschaften und gesellschaftliche Beduerfnisse“、ベルリン学術アカデミー（ドイツ）2016

9 OMIYA, Kanichiro、Teilen oder Tauschen、マンハイム大学（ドイツ）2016

10 OMIYA, Kanichiro、Die Ethik des Nahkampfs in der deutschen Literatur um 1800、ハーゲン大学（ドイツ）2016

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。